



JAPAN
LEATHER
AWARD
2018



JAPAN
LEATHER
AWARD
2018

JLIA
JAPAN LEATHER INDUSTRY ASSOCIATION



Grand Prix

ジャパンレザーアワード 2018

グランプリ



FOOTWEAR

フットウェア部門

ベストデザイン賞

吉田卓巳さん

— 個人 —

[Adapt]



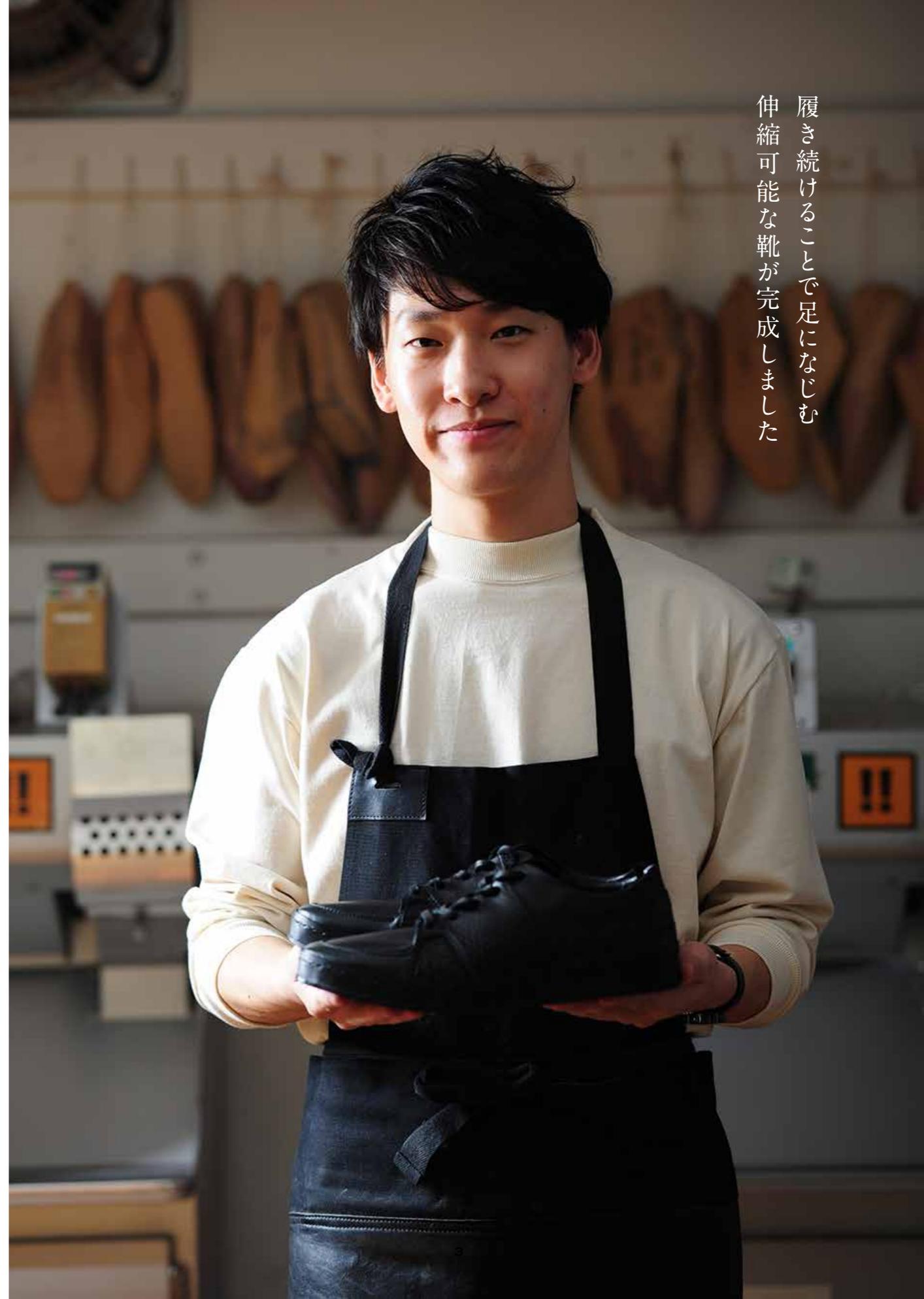
日々の暮らしに欠かせない靴。毎日とともに暮らすパートナーのような存在だから、できることなら足にしっかりとなじむ一足がほしい。大抵の人は、既成靴でも不自由を感じることはないだろう。だが、足の形は十人十色。当然、幅の広さも、甲の高さも、指の長さも異なる。外反母趾や扁平足、関節リウマチといった症状に悩む人もいる。

『ジャパンレザーアワード2018』でグランプリを受賞した吉田卓巳さんは、高校卒業後に入社した靴の量販店で接客を担当し、「サイズの合う靴がない」と悩む人の多さに驚いた。

「一年間販売を経験したのですが、サイズで悩んでいる人の数は想像以上でした。サイズの問題を解決すれば、消費者は快適な生活を送れるし、売り手側も在庫を抱えずに済む。そんなことを考えているうちに、日に日に靴を作りたいという思いが強くなっていきました」



履き続けることで足になじむ
伸縮可能な靴が完成しました





グランプリ受賞作「Adapt」の特徴といえば、多様な足のかたちにフィットする伸縮性。ソールなどに切り込みを入れているため靴が柔軟に動き、足の可動性をしっかり確保してくれる。

その後、高校時代から興味を持っていたヒコ・みづのジュエリーカレッジに入学。基礎を学ぶ傍ら、ゴムや木などのさまざまな素材を使った「サイズフリーシリーズ」と称する靴作りに没頭する。その過程で、「履く人が成長期でなければ、靴のサイズを調節する必要はない」と気づき、次作の構想として、履き続けることで足になじんでいく靴を頭に思い描いた。理想を実現するために使う素材は、革以外に考えられなかった。

数作のプロトタイプを制作していくうちに、目指す方向性は次第に固まっていた。伸縮性のある靴を作るために、革に切り込みを入れるという手法を思いついたのだ。

「数年前、レーザーカッターの使えるカフェでアルバイトをしていたときに、木材にスリットを入れた経験がヒントになりました。木材に切り込みを入れると、伸びはしないけど曲げることができるんです。その応用で革に切り込みを入れてみたら、曲げるだけでなく、伸ばすこともできて。これは使えると思って、ソールなどにこの手法を取り入れました」

また、素材として複数の革を使っているのも大きな特徴だ。屈曲して形が崩れやすい部位には、強度のあるコードバンを。逆に伸ばして形状記憶をさせたい部位には、タンニンなめしのヌメ革を。ホールドする力が必要なつま先と踵には、柔軟性と耐久性を兼ね備えたディアスキンを。適材適所で種類の違う革を使い、「伸縮の可能な靴」という理想像を、妥協せずに追求した。

「正直に言えば、コードバンは値が張るので、当初は使うかどうか悩みました。でも、ハギレを引っ張って強度を試すと、やっぱりこの革しかない、という思いになりました。コードバンを使ったボールジョイントは、タテヨコに伸びてほしかったので、三角形にカットして足の可動性を高めることができましたと思います」

吉田さんは、オリジナリティにあふれるこの革靴を、「順応」や「適合」を意味する「Adapt」と命名。卒業制作として発表した後に今回のレザーアワードに出品し、グランプリを受賞した。審査員にかけられて印象的だった言葉を聞くと、「『発想が新しい』といってもらえたのが嬉しかったです」と、顔をほころばせた。

現在は、仕事が忙しく作品を制作する時間もなかなか取れないが、「いろいろなプロダクトを作りたいという思いはあります」。そんな吉田さんのさらなる飛躍に期待したい。

吉田さんの母校であるヒコ・みづのジュエリーカレッジで撮影した制作風景。木型づくり、ミシン縫い、吊り込みといった一つひとつの工程を経て、斬新な発想をかたちにしていく。



吉田さんは現在、スポーツウェア専門メーカーでアシスタントデザイナーとして働く。

斬新な発想を生かした 類稀なるプロダクト



BAG

バッグ部門



FREE

フリー部門

フューチャーデザイン賞

宗形直輝さん

— MUNACHO!!! —

[Non-Euclidean-GERM]



一枚の革を図面に従いレーザーカッターで切り抜き、制作したバッグ。縫製の穴も切り抜かれるので、初心者でも3時間程度で完成でき、デジタル化された図面により、遠隔地で全く同じものを作る。職人が編んだ籠細工のようなデザインは、非ユークリッド幾何学の考え方とパラメトリックデザインにより構成され、伝統と未来が交差している。

フューチャーデザイン賞

平光明佳さん

— 個人 —

[自然冷却を目指した
猪鹿蝶なストラップが伸びたバッグ]



あまりにも暑かった2018年の夏。猛暑のなか苦心する人々を少しでも涼やかにしたいと作られた。北海道のエゾシカ革の他、アルミとトウモロコシの外皮を用いて、ラジエーターのような構造に配し、放射熱や気化熱による冷却作用を期待している（現在、その効果のほどを検証中）。このバッグを誰でも、どこでも作れるようにすることが最終目標なのだとか。

ベストデザイン賞

三谷忠史さん

— 有限会社 エムディオフィス —

[NUDE BAG]

(A3図面バッグ)



スケッチや図面、PCなどを収納するためのプレゼンテーションケース。A3サイズを折らずに取られる。本来バッグの内部にあるべき芯材を、外側にフレームとしてむき出しで配置。その結果、不意に落としてしまったときの衝撃吸収バンパーとしての役割も担っている。制作者自身もデザインの仕事をしているからこそ生まれた着想である。

ベストデザイン賞

中山智介さん

— 銀職庵水主 —

[カワノケンダマ]



革をより身近にしたいという思いから、子どもも大人も楽しめるようにと作られた革製けん玉。牛革の床革を積み革にして制作。実際に使って遊べるよう真鍮の芯材を入れ、革にはシェラック樹脂を用いた含浸・硬化処理を2度加えている。素材選びや製造手法など研究を重ね、ひと目見ただけでは革とわからない独特な風合いを手に入れた。



FOOTWEAR

フットウェア部門

フューチャーデザイン賞

廣瀬友和さん

— 個人 —

[弾性力応用半編上靴]



“西洋にはスニーカーという、履けば弾むように歩ける靴がある”という噂を聞いた鎖国中の日本の革靴メーカーが想像で作ったというコンセプト。伝統的な製法と素材にこだわった、ハンドソーンウェルテッド製法。目を引く二重の底は、5ミリ厚の本底革を折り畳むように配して強靱なばね構造を備え、衝撃吸収と弾性力による推進力を生み出している。



WEAR

ウェア部門

フューチャーデザイン賞

小森 匠さん

— Masksmith —

[“Stitch”]



ウェットフォーミングを用いて、額部や頬の自然なカーブを表現した革製マスク。ピエロをモチーフに、型を粘土彫刻で一から制作。純白革を使って白塗りを表現し、髪にはビビッドオレンジのナイロンを用いた。素材や色のセレクト、リアルな形状やディテールなどが相互に影響を与え合い、畏怖や狂気を感じずにはられない。



STUDENTS

学生部門

最優秀賞

川嶋望愛さん

— 兵庫県立姫路工業高等学校 —

[クリアベリーアラモード]



グリム童話のひとつ「ヘンゼルとグレーテル」に出てくるお菓子の家をモチーフに、プリンにラズベリーチョコレートがかかっているイメージで制作。まるで溶けているかのような滑らかな曲線はきれいにコバ処理され、甘い匂いで心が満たされそう。本体に使ったビニール部分から中が透けて見えるので、お気に入りのお菓子をいっぱい満たしたくなるバッグだ。



SPECIAL

ウェア部門

特別賞

小池文枝さん

— ヒノホ —

[葉っぱのパスケース]



制作者の実家が造園業を営んでいることから幼いころから身近に自然があり、いつもモチーフには自然なものを選んでいる。より実用的なものを作ったのがこのパスケース。ICカードを入れ、駅やコンビニで「葉っぱでお金を払う」イメージなのだとか。虫食いの跡や変色、葉の縁のギザギザや張り巡らされた葉脈など、リアルなディテールが美しい。



JURY'S SPECIAL AWARD

審査員賞

審査員賞とは



各審査員が、受賞作品9点以外で注目した作品を1点ずつ選出した賞で、表彰状が贈られる他、表彰式でも一般公開される。



長濱雅彦選

矢内 徹さん
— 株式会社 吉田

[ミニマムケース]

最小限のサイズとシンプルなデザインながら、多目的に使えるケース。カード、スマートキー、小銭、お札(四つ折り)といったさまざまなものを入れられる。



ドン小西選

及川耕来さん
— 個人 / The rooms (to the other side)

[HAND BAG]

ハンドバッグを想起させる持ち手を加えることで、「履く」という行動に、「持つ」という動作をプラス。何気ない普段の暮らしを、動作ひとつで楽しませてくれる靴だ。



鎌倉泰子選

岡田俊夫さん
— Dulles club (ダレスクラブ)

[フリーバッグ]

普段使いで堅苦しいバッグを持つのが嫌な人のための、シンプルで柔らかな革で作られた袋。閉めやすいグリップや、すぐに取り出せる万年筆フォルダーも備える。



阿部 浩選

三上さやかさん
— 有限会社 野村製作所

[Honu-YHJ]

イエローヘッドジョーフィッシュという海水魚をモチーフに制作。オスが口の中で抱卵し、稚魚を育てる魚なので、引手を稚魚にして口の中は海をイメージした青にしている。



天津 憂選

小林 東さん
— 専門学校ヒコ・みづのジュエリーカレッジ

[ATTRACTIVE PRESENCE]

「歩く姿に見惚れる」をコンセプトに、熱帯魚から着想を得た。煌びやかに塗られたヤギ革を型押しして鱗模様にし、無数の糸を付けて美しくしなやかなヒレを表現している。



佐藤直人選

椎名 賢さん
— Ken Shiina Design Laboratory

[kinchaku BP]

バックパックの前面に配された使い勝手の良い巾着型の開口部から、全体に美しいドレープが広がる。1枚の柔らかな革を用いて巾着部分と下部で違う表情を作り出した。



橋本太一郎選

猪野直也さん
— TEATROV

[ダレスリュック『和』]

伝統的な日本刺青を纏い、レザーとデザインを融合させたダレスリュック。達磨や桜といった縁起の良いモチーフを筆で一つひとつ丁寧に染色し、総手縫いで仕上げた。



伊藤 瞳選

富田慎太郎さん
— HENNES

[heel roll nature]

革の風合いに合わせた植物の模様とグラデーション、ヒールに採用した異素材であるアルミパイプが独特のコントラストを生み、なめらかに進むイメージを演出している。



有働幸司選

濱崎誠也さん
— ATW japan

[叩きたいけど叩けないハエ叩き(仮)]

カービングや透かし彫りしたうえ、西陣織をインレイしたハエ叩き。縁は編み込み、持ち手は12本編みで制作している。緻密で精巧なアソビ心であふれるひと品だ。

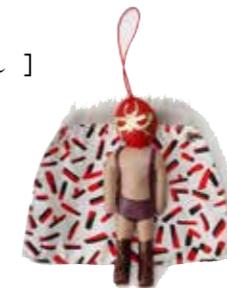


矢口真弓選

井口有希さん
— nomuo

[el luchador レスラーくん]

メキシコのレスラーをイメージして手縫いで制作。革の質感を生かしたマスクや衣装を着ている。別の革を使ったり、胸毛を刺しゅうするといったカスタムオーダーも可能。



吉田けえな選

細川瑠璃さん
— ke shi ki

[Flat bag]

マチのホックを外せばフラットに広げられるバッグ。立体から平面への変形を実現するために、柔らかさや厚みの異なる4種の革を組み合わせている。





／ 日本最大のレザープロダクトコンペティション ／

天然皮革を生かしたプロダクトの優秀作品を選出するジャパンレザーアワードが今年で11年目を迎え、新会場となるiTSCOM STUDIO & HALL 二子玉川ライズで審査会が行われた。全255作品を一般公開するとともに、長濱雅彦審査員長、ドン小西特別審査員をはじめとしたプロ審査員が受賞作品を選出。審査後に行われた作品応募者、審査員、皮革業界関係者のコミュニケーションを目的とした交流会も盛況のうちに終わり、次のトレンドを生み出す絶好の機会となった。



新会場iTSCOM STUDIO & HALL 二子玉川ライズにおいて、9月28日は応募作品一般展示、審査会、交流会を開催。翌29日は応募作品一般展示、ワークショップなどが行われた。

Japan Leather Award 2018 <http://award.jlia.or.jp/2018>